

【 復活讃詞 第2調 】

しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降

とき、かみのせいひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄

くをころせり。しせしものをちかよ
殺 死 者 地下

りふくかつせしめしとき、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆

よびていえり、いのちをたもうしゅ
呼 曰 生 命 賜 主

ハリストスわがかみよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 爾

き 歸 す。

【 十字架叩拜の讃詞 第1調 】

こおえいはちちとことせいしんにきす、
光 榮 父 子 聖 神 歸

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくにを
業 福 降 我 國

つかさどるものにてきにかたしめ、なんぢ
司 者 敵 勝 爾

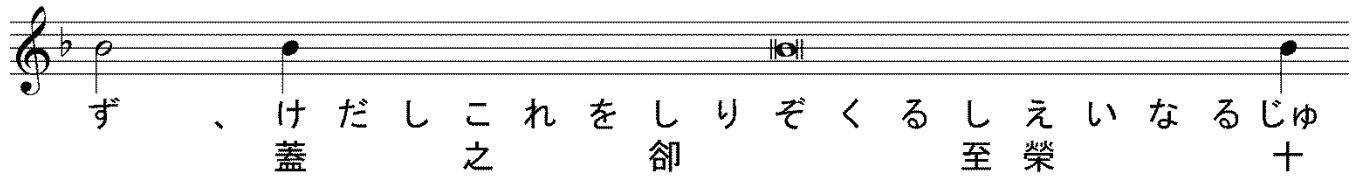

 のじゆ うじか にて なんぢの すま いを まもり
 十 字 架 爾 住 處 守


 た ま え 。
 給

【 十字架叩拜の小讃詞 第7調 】


 い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン。
 今 何 時 世 世


 ほ の お の つ る ぎ は す で に エ デ ム の も ん を ま も ら
 焔 劍 既 門 守


 ず 、 け だ し こ れ を し り ぞ く る し え い な る じ ゆ
 蓋 之 卻 至 榮 十


 う じ か の き は い た れ り 、 し の は り お よ び
 字 架 木 至 死 刺 及


 ぢ ご く の か ち は ほ ろ び た り 、 け だ し な ん
 地 獄 勝 亡 蓋 爾


 ぢ は 、 わ が き ゆ う せ い し ゆ よ 、 あ ら わ れ て 、
 吾 救 世 主 現


 ぢ ご く に あ る も の に よ べ り 、 ま た ら く
 地 獄 在 者 呼 復 樂


 え ん に い れ 。
 園 入

司祭) (黙誦： ^{せい} 聖なる神、^{かみ} 聖者の中に^{せいじゃ} 息い、^{うち} セラフィムより^{いこ} 聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより^{さんえい} 讚榮せられ、^{ことごと} 悉くの^{てんぐん} 天軍より^{ふくはい} 伏拝せられ、^{ばんぶつ} 萬物を^む 無より^{ゆう} 有と

なし、^{ひと} 人を^{なんぢ} 爾の^{ぞう} 像と^{しょう} 肖とに依りて造り、^よ 爾が^{つく} 諸の^{なんぢ} 賜を^{もろもろ} 以て之を^{たまもの} 飾り、^{もつ} これ^{かざ} を飾り、

ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其 救 の爲に痛悔
た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が聖な
さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾 に當然の伏 拝 讚 榮を 奉 るに堪うる者と
しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、爾 親ら我等罪人の口よりも聖 三の歌を受け、爾 の仁慈を
もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と體 と
せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
を聖にし、我等に生 涯 善 功を以て 爾 に務むるを得せしめ 給え、聖なる
しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生 神 女と古世より 爾 の 喜 を爲しし諸 聖 人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世世
に、



【 聖三祝文に代えて 】

しゅさ い よ 、 われら なんぢのじゅ うじか
主 宰 我 等 爾 十 字 架
に ふ く は い し 、 なんぢのせいなる
伏 拜 爾 聖
ふ く か つ をさんえ い せ ん。しゅさ い よ 、
復 活 讚 榮 主 宰
われら なんぢのじゅ うじかに ふ く は い
我 等 爾 十 字 架 伏 拜
し 、 なんぢのせいなる ふ く か つ をさん
爾 聖 復 活 讚

え い せ ん。しゅ さ い よ 、 わ れ ら
 榮 主 宰 我 等

な ん ぢ の じゅ う じ か に ふ く は い し 、 な
 爾 十 字 架 伏 拜 爾

ん ぢ の せ い な る ふ く か つ を さ ん え い せ ん。
 聖 復 活 讚 榮

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世

な ん ぢ の せ い な る ふ く か つ を さ ん え い
 爾 聖 復 活 讚 榮

せ ん。

しゅ さ い よ 、 わ れ ら な ん ぢ の じゅ う じ か
 主 宰 我 等 爾 十 字 架

に ふ く は い し 、 な ん ぢ の せ い な る
 伏 拜 爾 聖

ふ く か つ を さ ん え い せ ん。
 復 活 讚 榮

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讚めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讚めらる、今も何時も世世に、)

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、



司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ} プロキメン、^{なんぢ} 主よ、^{たみ} 爾の民を救い、^{なんぢ} 爾の業に^{ふく} 福を^{くだ} 降し^{たま} 給え、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われなんぢ} 我爾に^よ 呼ぶ、^{われ} 我の^{かため} 防固よ、^わ 我が^{ため} 爲に^{もだ} 黙す^{なか} 母れ、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾の民を救い、



【 使徒經 (アポストロス) 311 端 エウレイ書4章14節~5章6節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん} エウレイ人に^{たつ} 達する^{しょ} 書の^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われら} 我等に、^{おおい} 大なる^{しさいちよう} 司祭長、^{しよてん} 諸天を^へ 経たる者、^{もの} イイスス^{かみ} 神の子^{こあ} 有るに^よ 由りて、
^{われら} 我等の^{うけとめ} 承認を^{かた} 固く^{まも} 守るべし。^{けだしわれら} 蓋我等の^{しさいちよう} 司祭長は我等の^{われら} 柔弱を^{にゅうじゃく} 体恤^{たいじゆつ} する^{あた} 能わ

もの あら すなわちつみ ほかいっさい こと おい われら ごと ところ もの ゆえ
 ざる者に非ず、乃 罪の外一切の事に於て、我等の如く 試 みられたる者なり。故に
 われらきぜん おんちよう ほうざ つ きようじゅつ う をり かな たすけ おんちよう
 我等毅然として、恩 寵 の宝座に就くべし、矜 恤 を受け、機に合う 助 として、恩 寵
 え ため けだしおよ ひと うち えら しさいちよう ひと ため しみ ほうじ
 を獲ん為なり。蓋 凡そ人の中より選ばれる司祭 長 は、人の為に神に奉事することを
 にん ささげもの まつり つみ ため けん もの むち ものおよ まよ もの あわれ
 任ぜられて、礼 物と祭祀とを罪の為に献ずる者にして、無智なる者及び迷う者を憐
 よく けだしみづから またにゆうじゃく まと ゆえ かれ たみ ため ごと おのれ ため
 むを能す、蓋 自 も亦 柔弱に纏わる、故に彼は、民の為にするが如く、己 の為
 またつみ あがな まつり けん かつひとだれ みづか こ せんき う すなわちかみ め
 にも亦罪を贖う祭を献ずべし。且人誰も自ら此の尊貴を受くるなし、乃 神に召
 もの ごと しか か ごと みづか しさいちよう せんえい もつ
 さるる者なり、アaronの如く然り。是くの如くハリストスも、自ら司祭長の尊榮を以
 おのれ き あら すなわちかれ なんぢ われ こ われこんにちなんぢ う い もの
 て、己に帰せしに非ず、乃 彼に、爾は我の子、我今日 爾を生めりと、言いし者な
 またたしょう い ごと なんぢ はん したが しさい な よよ いた
 り、又他章に云えるが如し、爾メルキセデクの班に 循いて司祭と為り、世に迄らん
 と。

(比較用 口語訳) わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。彼は自分自身、弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものをしなければならぬのである。かつ、だれもこの榮譽ある務を自分で得るのではなく、アaronの場合のように、神の召しによって受けるのである。同様に、キリストもまた、大祭司の榮譽を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。また、ほかの箇所でもこう言われている、「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、アレルイヤ、

【 アレルイヤ 十字架叩拜主日第1調 】

司祭) 睿智

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ いにしえ え なんぢ かい きおく} 爾が古より獲たる爾の會を記憶せよ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ わ こせい おう すくい ち なか な} 神、我が古世よりの王は救を地の中に作せり、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

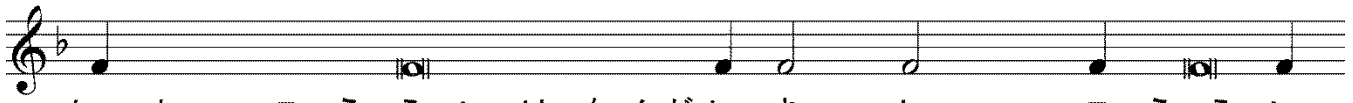
【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書37端 8章34~9章1節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

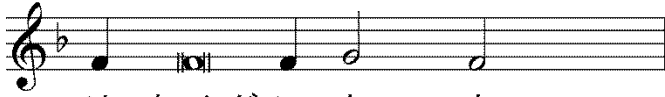


なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、主謂えり、我に従わんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負

いて我に従え。蓋己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の

ために己の生命を喪わん者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈

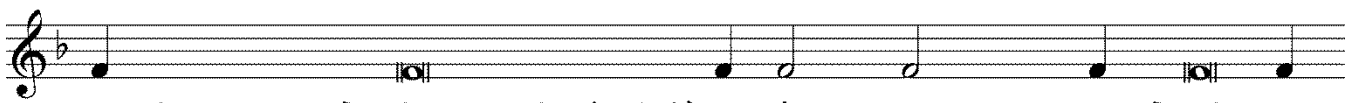
を損わば、何の益かあらん。抑人何を与えて、其靈の償と為さんや。蓋此

の姦悪の世に於て、我及び我の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖な

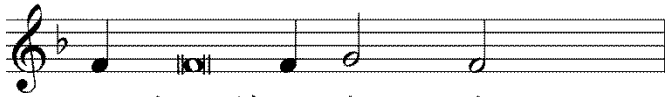
る天使等と偕に来らん時彼を耻ぢん。又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立て

る者の中には、未だ死を嘗めずして、神の国が権能を以て来るを見んとする者あり。

(比較用 口語訳) 主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の光榮のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。*****



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸